

O JUN（画家／東京藝術大学教授）

15人の作品を見て思ったこと。展覧会条件の規定されている空間とどう向き合うか、あるいはそれらを軽々とまたいでゆくものとの静かなバトルになっていたように思う。場、空間、イメージの手に負えない自由度をもっと獲得して行ってほしいと願います。

十一代 大樋長左衛門（年雄） （美術家／陶芸家）

キューブ空間の捉え方、アート概念を再考させられた。大賞作は人の脳と身体バランスを問いかけている。素材は、現代社会に当たり前で在るものをツールとしている。審査員賞作は、人が古来必要としてきた自然の恵みである木を時に廃材ともしてしまう人への警告でもあり、好印象をもった。

高橋源一郎（小説家／明治学院大学教授）

楽しくも苦しい最終審査だった。一次審査の企画を見て期待していたものが、実作になってみると意外に面白くなく、逆に、企画では半信半疑だったものが、目の前に実物で現れて圧倒されたりもした。最後に素晴らしい大賞作品を選考できて満足している。

田中 泯 （ダンサー）

カラダで作品に向き合うこと、がどの位、苦痛を伴うことか、分かってもらう必要はない、が、キューブの空気に僕のカラダの超部分達は間違なく反応しておった。ライブな生こそが作品性の根拠だと、今、思った。

中原浩大（彫刻家／京都市立芸術大学教授）

予想は、良くも悪くも裏切られて、期待を込めて大賞を贈り、敬意を表して個人賞を選ばせていただきました。

三輪眞弘（作曲家／情報科学芸術大学院大学学長）

プロポーザルだけで選んだ一次審査の印象から、想定以上の作品になっていたかが結果となったと思う。大賞を一つだけ決めることはとても難しかったが審査員にとってもエキサイティングな議論が交わされ満足のいく結論が出せたと思う。

鷲田清一（哲学者／京都市立芸術大学学長）

身体の深淵を探るもの、現代の身体状況と格闘するもの、身体へのこだわりに見切りをつけるもの（？）など、身体とはこんなにも昏い問題かとあらためて思いました。身体はほんとうはいやというほど社会にからまれていて、それが陰に陽にひしめいていました。
